慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	形成期のマルクスとその周辺 : その一 , 「プロレタリヤ」観
Sub Title	Der junge Marx und sein Kreis : I) Vom Begriffe "Proletariat"
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.8 (1966. 8) ,p.803(1)- 835(33)
JaLC DOI	10.14991/001.19660801-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660801-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

マリアンネ・ウェーバー著 大久保和郎訳『マックス・ウェーバーII』…飯田　鼎　103

西岡孝男著『日本の労使関係と賃金』……飯田　鼎　104

J. ロビンソン著 宮崎義一訳『経済学の考え方』……松浦　保　105

P. A. サムエルソン著 都留重人訳『サムエルソン経済学(上)』……宮尾尊弘　106

形成期のマルクスとその周辺

——その一、「プロレタリヤ」観——

平井　新

一

マルクシズムはまたプロレタリヤ社会主義（der proletarische Sozialismus）とも呼ばれている。かつてローレンツ・フォン・シュタイン（Lorenz von Stein）はその名著「現代フランスの社会主義と共産主義」（Der Socialismus und Communismus des heutigen Frankreichs. Ein Beitrag zur Zeitgeschichte 1842）の中でプロレタリヤ共産主義（Der proletarische Communismus）という語をしばしば使っている。この成語に示唆されたかどうかは無論明らかではないが、ゾンバルトは一九二四年にマルクシズム批判のために「プロレタリヤ社会主義（マルクシズム）」（der proletarische Sozialismus（"Marxismus"））と題する二巻の大著を著わした。以来プロレタリヤ社会主義という成語は特にマルクシズムの代名詞として今日まで広く親しまれることとなった。

プロレタリヤの解放を社会主義を通じて実現しようとする思想または運動を、広くプロレタリヤ社会主義と呼ぶとすれば、無論プロレタリヤ社会主義とは、ひとりマルクシズムに限られたものではなく、それ以前にも若干存立するわけである。バブーフの社会主義、および「平等党陰謀」は、マルクスによれば「全般的動乱の時代、封建社会の転覆の時代に、プロ

レタリヤが直接に自分自身の階級的利益を貫徹しようとした最初の企て[1]」であるといわれている。このバブーフ一派の「平等党陰謀」においては極めて精鋭果敢な少数の職業的革命家が人民（peuple）の名においてプロレタリヤのために決起した。この社会主義的革命の指導者は平等原理に覚醒した少数の尖鋭な革命家達であって、これに協力したプロレタリヤはなお無自覚な対象的な存立として全く受動的な役割を演じたにすぎなかった。バブーフの思想を継受したブランキの場合もこれと根本において同様であった。

サン・シモン、フーリエ、オーエン等のいわゆる空想的社会主義はその目的をプロレタリヤを超えた全人類の解放において、その運動の担い手を支配階級に属する有識の道義的人物に求めた。彼らの社会主義をプロレタリヤ社会主義と名付けるわけにはゆかない。プロレタリヤが自らの解放を自覚的に社会主義に求め、自らの手で主体的にその実現のために努力する。これがプロレタリヤ社会主義というものであろう。マルクスが「共産党宣言」の中で「プロレタリヤ運動は最大多数者の利益のための、最大多数者の自主的運動である[2]」といっているのはプロレタリヤ社会主義のことを指したものであろう。

プロレタリヤが社会主義の脇役から主役に転じたのは大体、マルクス出現以後と見てよいであろう。マルクス出現を契機として社会主義はプロレタリヤと結ばれるに至った。社会主義はプロレタリヤにおいてのみ可能な社会理想となり、この理想の実現の課題を担うものは、ほかならざるプロレタリヤそれ自身であり、彼らを措いて外にはない。かくてプロレタリヤ解放の事業はプロレタリヤ自身が主体的に果すべき課題となった。マルクスの社会主義が一般に厳密な意味においてプロレタリヤ社会主義と呼ばれるのはこれがためである。

注（1）マルクス・エンゲルス―共産党宣言。角川版　七三頁。
（2）マルクス・エンゲルス―共産党宣言。角川版　四八頁。

二

余剰価値説とともにマルクスの理論構造を支えている唯物史観は社会発展の法則を客観的に見つめる純粋の科学的な側面と、資本制社会の必然的崩壊と共産主義社会の必然的到来を約束する社会変革の実践的な側面、すなわち科学的な面と倫理的な面とをもつ。そしてこの倫理的な面が、人間性を疎外され、窮乏に喘ぎながら、しかも自然法の正義を自覚しつつあるプロレタリヤに対して、これまで既成宗教から与えられなかった清新な社会的福音を与え、そして社会的変革の成功に対する絶対的確信をプロレタリヤの心底に注入した。このように唯物史観のもつ経済中心の形而上学に階級闘争の理論を結合したことは、ある意味ではマルクスの天才的な創見であるとベルジャエフは言っている[1]。

マルクスは階級闘争を社会発展の推進力と認め、人間の歴史を階級闘争の展開する過程と観じて、資本制社会はブルジョワジーとプロレタリヤとが分裂して、互に抗争する場であり、この闘争が必然的にプロレタリヤの勝利に帰して、プロレタリヤの独裁が樹立され、この独裁がすべての階級別、階級対立を廃止して、無階級の共産社会が建設され、プロレタリヤと共に全人類は解放されると説いて、「資本制社会によって、迫害され、押しつぶされ、非人格化され、非人間化されたところのプロレタリヤ」に対して、人類の解放という世界史的な使命を与えている。

マルクスはこのプロレタリヤをどこに発見し、どのようにしてその概念を構成したのであろうか、彼のプロレタリヤ概念の本質はいかなるものであるか。

まずマルクス以前に溯って、プロレタリヤ概念の思想史ともいうべきものを簡単に述べておきたい。

注（1）ベルヂャーエフ―共産主義の問題。野口啓祐訳。

三

マルクスのプロレタリヤ概念は彼以前のプロレタリヤ概念とどう異なるか。

まず語源からいえばプロレタリヤ（Proletarian, Proletariat）という言葉は古代ローマに起源をもつもので、ラテン語のプロレタリウス（Proletarius）から出たものであるが、このプロレタリウスという言葉は子を育てる人という意味で、この言葉は、紀元前六世紀古代ローマのセルヴィウス帝の憲法の中に初めて見えており、社会の最下層に属し、貧乏で、子供を生む以外に能がなく、国家非常の場合だけに召集されて、海陸の賤役に従事する人間を指したのである。零細な商人、手工業者、解放奴隷などがプロレタリウスといわれた。続いて十二表法や、キケロ、プラウツスの著作に用いられたが、紀元後二世紀頃、この言葉の原義は全く忘れられてしまったが、しかし全く姿を消したのではない。[1]

近代の工業主義の発展に伴って、プロレタリヤの概念は初めて特殊な社会的経済的意義をもつに至ったことは人のよく知るところである。即ち今日では古代に意味した如く単なる貧乏人ではなく、自ら何一つの生産手段をもつことなく、ただ自分のもつ労働力をブルジョワに売ることによって生計の資をえている労働者群を意味するものであって、ブルジョワジーと同じく、十八世紀の後半、まずイギリスに始まり、漸次、フランス、ドイツ、アメリカなどに及んだ以謂産業革命を転機として、俄かに大量的に生れた労働者の群のことである。

プロレタリヤートという英語は、十八世紀の末、又は十九世紀の初めフランスから輸入されたもので、当時の出版物には広く見出される。

フランスでは、イギリスよりも早く使われているが、その一例を挙げると、モンテスキューはその「法の精神」（一七四八年）の中で古代ローマの実態を描く際に、この語を使い、[2] ルソーはその「社会契約論」の中で二回ほど使っているが、[3] いずれもローマ時代の原義で使っている。フランスのアカデミーがこの語を公式に採用したのは一八三五年のことである。

ドイツでは、グリムのドイツ語辞典の中で、この語は十八世紀に使われるようになり、ローマの最も貧困な階級に属し、子供の外、国家に寄与すべき何物ももたない人達のことを意味するラテン語からきたものであると書かれている。そして、この解釈はレッシング（Lessing）、グツコウ（Gutzkow）、フライタック（Freytag）、フライリッヒラート（Freiligrath）らによって支持されていると述べ、プロレタリヤとは、財産として何ももたず、手から口の生活をしている人のことであると書いている。

特に近代の経済学との関連について述べると、本来古典派としては、自由主義経済学は、個々の企業家の自由競争を建前とする資本主義経済組織は必ずや全社会の調和と利益を招来するという楽観的な個人主義を信念とするものであるから、プロレタリヤをば企業家に対立し、専ら彼らに奉仕する独立の階級として認めたり、労資の対立を産業組織そのものの本質に内在する現象と考えたりすることは到底できないことであった。ケネー、チュルゴー、スミスの時代には、まだ階級問題への関心を要求するほどの社会的背景も現われてはおらず、マルサスやリカードオの如き悲観論者の眼にすらもまだ労資の対立抗争というような社会学的事実は問題にされなかった。労働者階級の惨状が古典学派の楽観主義をうち砕き、これら惨状や恐慌、不景気の背後に存在するものは固定不動の自然法ではなく実は社会組織の結果であり、現存の産業秩序が激しい社会対立の育成者であることが次第に判明するに至って、プロレタリヤの概念がにわかに学者間の論議の対象となるに至ったのである。古典派経済学者達が賃金労働者を呼ぶのに通常使った言葉は、ouvrier, labourer, travailleur, workman 等であった。

サン・シモン（Saint-Simon 1760—1825）ですら「プロレタリヤ」を今日の意味では使っていない。彼の教説は自由主義経済学に反対するものであるから、彼の著作の中には無論、プロレタリヤという言葉の発展に有利な文言があることは事実で

ある。その中に、階級とか階級闘争とかの観念も見え、貴族制やブルジョワジーは自然の敵と認められており、経済的個人主義に対して、極めて批判的であり、また社会改革案も若干示されている。その上、彼はしばしばプロレタリヤ階級（la classe proletarie）のことに言及しており、産業者（Industriels）自体の内部においても所有者（propriétaire）と非所有者（non-propriétaire）の間に緊張の存在することを見落さなかった。しかし、サン・シモン生前のフランスでは労資間の緊張は左程にも現われておらず、工業化や社会分化の過程もまだ低調であったので、サン・シモンは、労資の対立が社会の根本問題であるとまで認識するに至らなかったのである。彼が提案した社会改革は「産業階級による統治」ということであるが、実はこの産業者階級の中には今日の資本家や労働者に該当するものが含まれており、その中には最も賤しい労働者から最も裕福な工場主、最も練達の技術者まで、いやしくも真に信頼しうる同志である協働者のすべてが含まれていて、彼はこれを「産業的活動の素晴らしい統一体」と呼んでいる。従って、サン・シモンには、歴史を造る上に重要な役割を果す使命をもつ、独立自給階級としてのプロレタリヤの概念などというものは存在しなかったのである。無論、彼は時折、プロレタリヤという語を使ってはいるが、その場合の意味はただ、財産をもたないところの人間のことであって、労働者に自由を与えることは却って文明にとって不幸な結果をもたらすとさえ述べている。従って、彼の社会改革の思想は専ら有産者に向けられていたのである。同様のことはフーリエ（Fourier 1772-1832）についても言える。但し、フーリエは、プロレタリヤを特に田舎者とプチブルジョワを指すことに用いている。社会改造に関するプロレタリヤの歴史的使命などは、彼の眼中に全くなく、専ら有産有識の人との協力に期待したことはサン・シモンやオーエンなどと全く同様であったのである。

注（1）Briefs; The Proletariat, 1937, p.52-53.
（2）Montesquieu; L'esprit des lois, XXVII. : Rousseau; Contrat social, Book IV, Chap. 4, Brief; a. a. O., p. 55.
（3）Brief; ibid., p. 55.

四

産業秩序の中に、労働者と資本家との鋭い分裂が生れる傾向のあることを認識した最初の人は、シスモンディ（J. C. L Simonde de Sismondi' 1773-1842）であった。彼は自由競争の制度が特に機械の出現後、いかにして労働と資本との中間のすべての階級を排除するに至ったかを知って、この制度に徹底的な批判検討を加えた。プロレタリヤの概念は彼の著作の到る処に使われているが、特に一八三七年出版の「経済学研究」（Etude sur l'économie politique）では、前著「経済学新原理」（Nouveaux principes d'économie politique 1819）におけるよりも一層見事に分析されている。前書の序文の中で自由競争とこの闘争の直接の結果によって生じた普遍的な闘争の最中に社会に生じた根本的変化とは人間の条件の中にプロレタリヤがはいってきたことである。近代の社会が[1]プロレタリヤの労働に対して十分な報酬を支払わず、プロレタリヤの犠牲において生きているといっても決して過言ではない。自由主義経済学者の熱望する進歩は資本の制覇とプロレタリヤの出現と共に終りを告げた。自由競争の制度とこれに伴う周期的恐慌のために、極貧という事態が発生した。プロレタリヤは職を資本家に求めなければならないから、久しく職を失えば窮乏に転落するのは当然である。プロレタリヤとは貧しい人々の群であって、その境遇が少しでも改善されると必ず結婚と出産の増加を招く。財産がないので、深慮も節約もしない。労働の制度が改善され、労働者が何か財産らしいものをもち、生活がよくなるという希望をもてば、マルサスの教義はその力を失うであろう。労働者を生産手段から引き離すところの悪条件を育成する諸条件が存続する限り、プロレタリヤは益々増加してゆく。この自己永続化の過程が進行するにつれて、必ずや過少消費のための激しい恐慌が発生して、周期的に国民経済を荒廃させる。

労働者は自由であるという、しかも彼らは契約で資本に結びつけられているのである。彼らは何ももたないから。労働者

の間には競争が行われるが、この競争が資本のため有利に作用する。資本家の側には労働者に対する責任感というものがない。労働者は何ももたないから無力無援である。この無力は世代から世代へと成長してゆく。籤で決められるところには遠い未来のために、備える刺激がないからである。財産と労働、資本とプロレタリヤとの間の懸隔は益々増大してゆく。

ところがシスモンディは、階級の発展や階級闘争については何も見ていない。彼のプロレタリヤは貧乏で、受動的で、無口で、その言葉の真の意味での階級というよりもむしろ、不幸な人々の全く無組織な集団ともいうべきものであった。[2] 何の自意識もなく、何の自主的な思考もしない階級闘争的な解放精神ももたない階級というより、むしろ、やがて生れる階級のための素材ともいうべきものである。シスモンディが分析したものは労働者を支配していた窮乏であった。

しからば、プロレタリヤの脱出の道はどこにあるか。シスモンディはこれを自由主義経済学の自由放任政策と完全に手を切り、思い切った社会改革の制度にあると考えた。「農村にも都市と同じく工場を置くという工業の分散、大規模生産の停止、技術的進歩の速度をおとすこと、雇主が被雇用者の個人的厚生に責任をとること」、これらの施策をシスモンディは主張したのである。

ペクール（Constantin Pecqueur, 1801-1887）の見解は、シスモンディと多くの共通点をもつ。彼は工業問題に対してシスモンディと同様に鋭い洞察力をもつ。またシスモンディと同様に、彼もまた改革の代行者としての有産階級と国家に対して多大の信頼をもつ。しかしペクールは、社会の病根に真に有効な「急進的方法」の存在を認める点ではシスモンディを遙かに凌駕している。「プロレタリヤは自己の真の解放を自分自身からのみ期待しなければならない。若しそれができなければ工業的、農業的農奴制に陥ることになろう」と。

プルードン（P. J. Proudhon 1809-1865）、カベー（Etienne Cabet 1788-1856）、ルイ・ブラン（Louis Blanc 1811-1882）らはいずれもこの問題の論議には大した貢献はしていない。彼らはいずれもこの問題の解決のため、社会や国家の力に訴えた。

注（1）Sismondi; Étude sur l'Économie politique. 1837, Tome I. p. 34-.
（2）Briefs; ibid., p. 60.

五

ドイツでもイギリスやフランスと同様に、十八世紀の三十年代には、工業主義がおもむろに産業界に登場して、プロレタリヤ問題への関心が強く喚起されることとなった。逸早くこの問題に着目したのは、ロマン主義者であり、カトリック的哲学者、神学者更に社会哲学者として令名あったフランツ・フォン・バーダー（Franz von Baader 1765-1841）[1] である。バーダーは久しく殆ど忘れられているが、しかしマルクス以前に、しかも後年マルクスの場合に重要な役割を演ずべきプロレタリヤの二つの本質的特徴をすでに発見した。そしてこの特徴（メルクマール）は経済的、社会的の二つである。プロレタリヤはその労働を商品として売る。バーダーによれば、工場主はこの労働の事実上の価格たる労賃を自然価格以下におし下げ、それによって労働生産物に対する売上げを増加して、利潤を獲得する目的で、プロレタリヤに対して「共謀」を企てる。労働者は工場主に全く支配され、その労働力を値切られて、いよいよ隷属し、非人間的な労働条件と生活条件の下に押し込められる。しかも今日の社会組織では労働者はこれから身を守ることができないので、この不正を免がれることができない。バーダーの見るところによれば、これが匡救策は唯一つ。それは革命ではなく、プロレタリヤが自らその立場を個人的立場から全体的立場に転換することによって社会を改良する以外に方法はない。プロレタリヤの自由は彼らが社会全体を代表し、全体の立場に立つ場合に初めて実現される。

バーダーのプロレタリヤ概念の特色と見るべき点は、

一、労働力が商品として扱われることは不自然である。

二、労働の商品的性格は労働の自然的な価値をきずつけるものである。
三、労働者は完全な人間であるが故に人間社会の完全な成員である。
四、労働者は、権利と義務をもつ社会的に承認された身分に属する場合において初めて完全な人間となりうるのである。

試みにマルクスと対照すると共通点が二つと思われる点は、
一、資本主義では、人間労働が単なる商品となるということを洞察していること。
二、労働者の人間的価値を尊重していること。

マルクスと相違する点は、
一、プロレタリヤの発展に対し、歴史的な洞察を欠いていること。
二、闘争的階級と反対の身分概念。
三、革命的な階級闘争によって、資本制社会の顚覆を計らんとするマルクスと反対に、改良思想を唱えていること。

バーダーについで、経済学者モール（Robert von Mohl 1799-1875）[2]の所見をききたい。

モールによれば、プロレタリヤとは個人の罰からでもなく、異常な偶然からでもなく、財産関係と社会関係のために社会の一部を形成しているところの一つの階級のことである。モールはマルクスと同様に、プロレタリヤと貧乏人とを区別する。貧乏であるということは相対的で不確定な概念である。プロレタリヤはたしかに貧乏である。しかし、彼らが貧乏であるということは、とりわけ社会構造の中に必然的に規定されている。なぜなれば、今日の社会内部において、プロレタリヤは、㈠他の労働力の競争に左右され、㈡資本の不安定な地位に左右され、㈢不確定な労働法に左右されているからである。機械は工業プロレタリヤ成立の原因であり、土地の自由分割は農業プロレタリヤ成立の原因である。

しからばその救済策はどうかといえば、モールは、マルクスとは全く反対に闘争と国家の廃止に反対する。モールによれば、国家は、一つの永遠の価値であり自由主義的法治国家である。マルクスは、この自由主義国家をプロレタリヤの搾取手段としか認めない。モールは国家はプロレタリヤからの脅威をうけるので、国家のために緊急の救済手段を講ずべきであるという。しかし、モールは、マルクスのように、これを階級闘争に求めたり、労働組合の結成に求めたりすることには反対であって、有産階級、例外的には国家自体が自衛の策を講ずべきであると、後年のラッサールを思わせるような考えをもっていた。

注(1) Franz v. Baader; Über das dermalige Missverhältnis der Vermögenlosen oder Proletairs zu den Vermögenbesitzenden Klassen der Sozietät 1835.; Grundzüge der Sozietätsphilosophie 1837. Schraepler; Quellen zu Geschichte der sozialen Frage in Deutschland 1960 および Brügel u. B. Kautsky; Der Deutsche Sozialesmus v. Ludwig Gall bis Karl Marx 1954 等に収載された Baader の著作抜粋による。

(2) Robert v. Mohl; Polizeiwissenschaft nach den Grunzüge des Rechtsstaats, 1832-34.

六

プロレタリヤの概念を、実践的経験と理論的研究の基礎の上に初めて系統的に解明したのは、社会主義思想史上の古典的名著として広く知られている「現代フランスの社会主義と共産主義」(Sozialismus und Communismus des heutigen Frankreichs, Ein Beitrag zur Zeitgeschichte 1842) の著者ローレンツ・フォン・シュタイン（Lorenz von Stein）である。

シュタインは、この書の第一部「平等の原理」の中に第一章「プロレタリヤ」(Das Proletariat) と第五章「ブルジョワジーと人民」(Bourgeoisie und Peuple) の二章を設けて専らプロレタリヤの問題を論じているが、これはおそらく、プロレタリヤの問題を扱った最初の最も理論的で系統的な作品であろう。そればかりではなく、それはまた若きマルクスに深い感化を与えたものといわれている。この問題については別の機会に詳論したい。

シュタインのプロレタリヤ論はサン・シモン、ルイ・ブラン、ヘーゲルから深い影響をうけているが、特にヘーゲルの弁

証法と国家論がその底流をなしていることを見逃してはならぬ。

シュタインはまずプロレタリヤとはいかなるものであるかを、それと社会主義、共産主義との内的関連を暗示しながら述べる。「社会主義と共産主義とを、その現存の最も内部的な生命によって隠している紐帯はどこにこれを見出すべきであろうか。この紐帯が一つの真実にしてフランスの今日の状勢の核心に真に属するものであるならば、これは決して、突然発生したものではなくて、それはフランスの最近の歴史の全体の結果として現われたものに違いない。国家的結合の諸要素は次第に全く別物となった。そして、その中に全く新しいものが一つ現われた。それは第一革命以前には絶対に注目されず又尊重されずに伏在していたもので、誰もそれに独立的に意思し、または思考する権利を許容せず、否国家も個人も愛または実行上の援助をも与えなかったものである。それはプロレタリヤである。プロレタリヤとは社会的生活におけるその勢力の基礎としての教養も財産ももたず、しかも人格に始めてその価値を付与するところのそれらの財貨を全く欠いては生存できない人々の全階級のことである。共産主義と社会主義が眼中に置いているのはこの階級、その権利と運命とである。プロレタリヤの全意義はその現象にある。彼ら（共産主義と社会主義）はプロレタリヤが陥っている不幸の感情から出発した。プロレタリヤの一切の夢想的希望と計画とは彼らの中に要約され、そして部分的にその内的に完成された体系となっている。……唯一の目的は、一般的財貨即ち所有と知識をば、今日、拒まれている人々に適当に分配することである。それが共産主義と社会主義の共通の原理である。[1]」

プロレタリヤの概念規定としては、甚だ漠然としており、その上、倫理学的な色彩が強いが、プロレタリヤと社会主義、共産主義との内的関連、必然的な結付びきを指摘していることは、マルクスに先んずるものであろう。

シュタインは近代的プロレタリヤの発祥地をフランスと見る。プロレタリヤがフランスの歴史の中に初めて、特異な姿を現わしたのはフランス革命であって、この革命の渦中、国民議会を解放し、チュイルリー王宮を攻略し、ロベスピエールを

擁立し、アンリオ守備隊をつくった人達は、いずれも大胆で、武装された腕で、にわかに注目されるに至ったプロレタリヤであった。大革命まではプロレタリヤは存在しなかった。この時代以来プロレタリヤはフランスの歴史の中に一つの地位を占めることとなった。この革命の巨大な嵐と、新しい共和国が国の内外で交えた闘争の中からプロレタリヤは二つのことを、即ち、自己独特の地位と革命における自己の重要性とを学んだ。

フランスの歴史に現われたこの新なる要素は誠に危険な要素と考えられる。その数と、しばしば証明された勇気の故に危険であり、彼らの統一意識の故に危険であり、最後に、その計画の実現は革命による以外に方法はないという感情によって危険である。プロレタリヤを抑えて、無法な企てによる災害を未然に阻止しなければならない。なぜというに、プロレタリヤの意図するところは、結局、共同生活の二つの絶対的な礎柱を押し倒すこと、法律と財産の神聖を破壊することによってのみ達成されるからである。[2]

プロレタリヤは近代の産物である。いかなる古代国家にもプロレタリヤというものはいなかった。無論この時代に奴隷もいたし、貧乏人もいた。しかし古代世界の貧乏階級は現代のそれとは全く異っている。ギリシャでは貧乏の問題は殆んど意味がなかった。これに対し、ローマではこの問題はこの世界都市、従って、全世界帝国の全行政の一つの重要な部門を占めていた。ローマでも無産者の数は一つの巨大な、恐るべき力となり、革命の潜勢力となっていたので、政府は有産者の安全のために緩和の策を講じた。それでは今日の下層階級の関係をリヴィウス帝時代のローマの生活の中に再現することができるかといえば、それはできない。両者は根本的に相違するからである。この相違を知らなければ、今日の事態を明確に理解することはできない。[3]

それは貧乏人とプロレタリヤの相違である。貧乏人というのはただ自分の物を何一つもたないだけでなく、その意志があっても自分で生計を立てることが肉体的にできない人達のことである。プロレタリヤは所有をもたない。しかし労働力をも

ち、しかもこれを使用する意志をもつものである。ローマの貧乏人は或る時は第一のこともあり、また或る時は第二のこともあるが、ただ彼らに欠けているものがある。それは、自分で何物かを獲得するという意志である。ローマ帝政時代の庶民というのは、結局、国費で生活するより外に生活費をもたない無能者の集り（eine Anhäufung von Taugennichtsen）である。プロレタリヤはそれを好まない。プロレタリヤは労働することを好む。しかも喜んで、良く、そして多く。しかしプロレタリヤはその労働に対して、適正な賃金を求める。彼の労苦とその所得との不均衡がプロレタリヤの不満への、第一の、直接の原因である。従ってプロレタリヤと余り働かないで多くの利潤をえている人々との対立の原因となり、全く働かないで、所有の忻びをえている人達に対する反抗の原因となるものである。このように現代のプロレタリヤは古代のすべての類似現象とは厳格に区別される。貧乏人とプロレタリヤとを混同してはならない。プロレタリヤは近代史に属する。[4] シュタインはプロレタリヤという言葉の代りに、無産者（der Nichtbesitzende）とか無産労働者階級（die Classe der nichtbesitzenden Arbeiter）[5]とか、又はルイ・ブランにならって人民（Peuple）[6]という言葉を使っている。

プロレタリヤの資本家（ブルショワ）に対する関係は何によって規定されるかと言えば、シュタインはこれを市民社会の所有関係に求める。

ブルジョワ革命（政治革命、民主革命）は身分的所有、不労的所有を止揚し、それに代って、労働によって獲得された所有を社会の基礎として設定した。この所有の分配関係によって社会階級間の秩序は決定される。

労働によって獲得された資本は、獲得によって生じたものであるから、他人の獲得に対してはただ自己の労働によってのみ地位を保持してゆくことができる。故に一旦、獲得された所有は必ずや再び営利資本（das erwerbende Kapital）となる。所有獲得の純人格的な能力は労働である。労働力は営利（獲得）の条件であり、必ずしも所有を生みだすものではないが、常に所有を求めて努力する。しかるにこの目的を達するためには、労働力は労働の対象である素材をもたなければならぬ。この素材は営利資本に属している。[1] 従って、労働力は、資本が提供するものを加工することによって、獲得（営利）と所有とを手に入れるために営利資本と結合しなければならない。一方営利資本は、所有者個人の労働力を越えることによって、自己の労働を使用すべき資本すらもたない人々の労働力を必要とする。このようにして直ちに資本と労働との間の自然的、有機的関係が成立する。このようにして民主革命（政治革命、ブルジョワ革命）の後においても、有産者と無産者（der Besitzende u. der Nichtbesitzende）というすべての社会の二大階級の区別が生ずる。有産者の階級は営利資本を所有する階級であり、無産者の階級は無資本にして労働を有する階級である。

さて、この状態は最初のうちは完全に、調和的な、人格の概念に適合した状態であった。営利資本は人格的労働によって達成される人間の物質的発展を代表し、一方無資本労働はこれを達成するための能力であり、天職である。資本は獲得に開放されている。この点において両者の利害は相互的であり、この営利社会の秩序は完全に自然にかなった自由な秩序と思われた。ところが現実において、無資本労働は資本の獲得から除外される結果となった。資本の増殖は資本相互間の競争と相まって、生産費の引下を要求し、その主要対象である賃銀を可及的に低下させることとなる。かくて資本は、その利益によって必然的に労働の無資本性（Kapitallosigkeit）即ち労働が資本を獲得することができない状態を永続的なものとする勢力となる。資本を全くもたない者はいかなる資本をも獲得できない。このようにして、有産階級と無産階級とは有産者と無産者という身分となって、所有と無所有とは人間種属の中に固定して、社会秩序は確定した、閉鎖的な秩序と化してしまうのである。[7]

このことによって各人の社会的地位は不動の、変更しえないものとして与えられる。従ってこの社会的地位は労働が獲得と財産とに発展することを阻止するので、労働の概念と矛盾する。それは原理上自由な社会を、事実上、不自由な社会に変えることによって、自由の理念とも矛盾する。更にこの社会的地位は単にただに無産者を資本の獲得から排除するばかりで

なく、無資本の労働を稼働資本に、無産者を有産者に従属させる。この従属関係は永続的なものとして、労働身分の有産身分への従属を意味する。しかるに無産者の教養は年を追うて向上して、この矛盾を意識し、批判して、やがて平等の観念に到達し、この矛盾を克服せんとする。平等の原理が営利の上に築かれた社会の不平等に到達すると、この矛盾の内部的解決を求める研究的精神の活動が現われてくる。(8) この活動は外部的闘争に先行する。そして目立たずにいわば社会的土壌の地下に、この活動は道を切り開いてゆき、そしてその秩序が強固であればあるほど外部の圧迫の下に、被圧迫者のその活動成果に対する確信は益々強いものとなる。平等原理の実現を目指す精神活動の要請に応える社会理論の代表的なものが、共産主義といわれている。平等原理といってもプロレタリヤの求めるものは単に政治革命によって実現されたあの封建的特権の廃止を意味した所謂「法の前の平等」というようなブルジョワ的、形式的なものに止まるものではなく、更に進んで一切の私的所有の止揚を意図する実質的な社会的平等の実現にあるから、その要求の行きつくところは当然、共産主義であるとシュタインは次のように言っている。

「平等という思想はフランスの国民意識の基礎である。この平等は有産者に対しては実現されているが、人民、即ち本来のプロレタリヤに対しては実現されてはおらぬ。故にプロレタリヤにおいては、平等は現存するものの否定となって現われる。何となれば現存するものは不平等を設定しているからである。かくして、否定に対する事実上の地盤が見出だされる。しかしプロレタリヤは曾て第三身分が他の身分に対して戦ったその闘争の相続人である。……故に平等の原則が、ここにおいて一方に偏して、現状の単なる否定たるに止る所以が説明できる。……かくして、それ自らにおいて免がれ難い、これまでの歴史それ自らによって絶えず確認された一つの結論が生ずる。曰く、共産主義プロレタリヤの中においてのみ可能であると。」(9)

とは言ってもシュタイン自身は、無論、共産主義を是認するものではない。彼は革命的状況からプロレタリヤ対ブルジョワジーの階級的闘争の原理を導出することなく、むしろこれを克服する唯一の力を国家に求め、国家を支配階級の影響から解放して、その理念的規定をなす自由の実現を企図すべきものであると説いて、社会改良の立場を明らかにし、「社会的王政」の観念を提示した。

以上述べたところから知られるように、シュタインはプロレタリヤを資本制社会の歴史的発展に条件付けられた現象とみた。この点では、後に来るマルクスも同様である。またシュタインは、プロレタリヤ発生の原因を経済的・社会的関係にあると認めるが、この点もまたマルクスに先んじていることを見逃してはなるまい。(10)

注（1） Stein L. v.; Der Sozialismus u. Communismus des heutigen Frankreichs, Ein Beitrag zu Zeitgeschiachte, 1842, S. 6-7.
（2） Stein; ibid, S. 9-10.
（3） Stein; ibid., S. 12-13.
（4） Stein; ibid., S. 13.
（5） Stein; ibid., S. 84.
（6） Stein; ibid., S. 70.
（7） Stein; Geschichte der sozialen Bewegung in Frankreich von 1789 bis auf unsere Tage, 1959, Bd. I, 104-109.
（8） Stein; Geschichte, Bd. I. 1959, S. 110-.
（9） Stein; Der Sozialismus u. Communismus des heutigen Frankreichs, 1842, S. 355.
（10） Steinbüchel; Sozialismus, 1950, S. 108.

七

マルクスのプロレタリヤ論を考察するに際して、忘れてならぬことは、その背景をなす史的唯物論という世界観との関連であって、この世界観の生成、発展に照応してそのプロレタリヤ観が変化しているということである。マルクスのプロレタ

リアのイメージは決して彼自身の経験や観察の結果として生れたものではなかった。彼はこのイメージを当時の工場の条件の観察や工業労働者との直接の接触や経済学の研究から経験的にえたものではなかった。彼のプロレタリヤ概念の構成作業は彼の社会主義概念の場合と同様に、まず哲学的方法によって着手されたのであって、彼はプロレタリヤの概念をヘーゲル、フォイエルバッハ、ヘス等の哲学的影響の下に開発した人間自己疎外の教義の中に同化したのである。(1)

マルクスが初めてプロレタリヤという言葉を使い、その意義と使命について語ったのは、一八四三年末頃に執筆され、翌四四年パリで発行された「独仏年誌」に掲載された「ヘーゲル法哲学批判序説」(Zur kritik der Hegelschen Philosophie, Einleitung) である。

この論文で、マルクスは特にドイツにおける社会革命の可能性を展望して、ドイツは政治革命（民主革命、ブルジョワ革命）を素通りして、いきなり社会主義革命をなしとげるであろう。本来、政治革命は中産階級によって遂行されるのであるが、この革命の中で中産階級は社会を自己の利益に従属させて自己の目的を実現するのである。ところがドイツには政治革命を遂行しうるような中産階級は存在しない。ところで全人類的革命（社会主義革命）を遂行するのはいかなる社会階級かといえば、それは全社会の利益とは別個の独自の利益というものをもたない階級、すなわちその利益が全人類の利益と一致するような階級、すなわち新興のプロレタリヤがこれであると述べて、ドイツ解放の使命を担う主体がプロレタリヤという新たに抬頭しつつある階級をおいて外にはないと論じ、では来るべきドイツの社会主義革命の準備をする上で、哲学は、いかなる役割をつとめるべきであろうか。マルクスはここで哲学が観想の世界から実践の世界へ、書斎から街頭へとその実践化の必要を説き、「歴史に奉仕する哲学」は現実の力に対する批判となり、従って哲学自身が力とならなければならぬ。哲学はプロレタリヤに協力して、その具現するところの革命的理論とならなければならないと強調していう。

「ドイツ人の解放は人類の解放である。この解放の頭脳は哲学であり、その心臓はプロレタリヤである。……批判の武器はもちろん武器の批判に代わることはできず、物質的な力は物質的な力でなおすより外にはない。……理論はそれが大衆の心をつかむや否や物質的な力になる……哲学はプロレタリヤを止揚せずに実現されることはできず、プロレタリヤは哲学の実現なしには止揚されることはできない。」といい、「哲学がプロレタリヤの中にその物質的武器を見いだすように、プロレタリヤは哲学の中にその精神的武器を見いだす。そして思想の稲妻がこの素朴な大衆の土壌へ深く落下するや否や、ドイツ民族の人間への解放は成就されるであろう」(2) といって、哲学と相まってプロレタリヤの革命的使命の重大なことを強調している。

しからば、プロレタリヤとはいかなる性格の社会階級であるかといえば、それは「市民社会のいかなる階級でもない市民社会の一つの階級であり、あらゆる身分の解消であるところの一つの身分であり、その普遍的な苦悩のゆえに普遍的な性格をもち、何か特殊な不正ではなく、不正そのものを蒙っているために、なんら特別の権利を要求しない一つの階層である。その階層は、もはや歴史的な権原ではなく、ただ単に人間的な権原だけを拠りどころとすることができ、ドイツの国家制度の諸帰結に対して一面的に対立するのではなく、その前提に対して全面的に対立するものであり、最後に、社会の他のあらゆる階層から自分を解放し、そうすることによって、社会のあらゆる階層を解放することなしには自分を解放することができない階層である。一言でいうならば、人間の完全なる喪失であり、従って、ただ人間の完全な回復によってのみ自己を回復しうるような一つの階層である。社会の解消を特殊な一階級として体現したもの、即ちプロレタリヤである」と。

プロレタリヤの概念が、このようにフォイエルバッハ流の哲学的表現によって語られており、後年の経済学的な表現はまだどこにも見られない。マルクスは当時すでに経済学を可成り研究しており、唯物史観を仕上げるために経済学のもつ意義を意識してはいたが、なお依然としてヘーゲル、フォイエルバッハの強い影響を脱することができず、哲学を第一位におき、すべてを哲学的に考察する傾向を強くもっていた。マルクスによれば、この哲学のうちにこそ、プロレタリヤは「その精神上の武器」を見いだし、ほかならぬ哲学こそ社会主義革命の頭脳、すなわち、あらゆる種類の抑圧と搾取からの人類

の解放の「頭脳」なのである。「人間の完全な喪失」といい「人間の完全な回復」という言葉の端々にも、フォイエルバッハの「現実的人間主義」の影響の並々ならぬことを強く示している。

このプロレタリヤはどうして生れたのかといえば、マルクスは「プロレタリヤはドイツでは、工業の運動が侵入してくるにつれて、ようやく生成し初めている」といって、ここに早くも、プロレタリヤを資本主義の産物として認識し、プロレタリヤを自然発生的な貧困と区別し、この貧困に対して、マルクスは、プロレタリヤの経済的社会的地位のために生産された貧困を対立させた。しかもこのプロレタリヤという大衆は「社会の重圧によって機械的に抑圧された大衆ではなく、社会の急激な解体、特に中産階級の解体から発生した大衆」[3]である。このようにして近代工業の発展が革命的な階級を造り出し、その貧困が、私有制との関連において考えられている。階級と階級闘争が大づかみにとらえられてはいるが、そこにはまだ、これと私有制に基く経済機構の必然の結果としての貧窮化の作用との関連がとらえられていない。

注(1) Tucker, Robert; Philosophy and myth in Karl Marx, 1961, p. 113.
(2) Werke I, S. 391. 大月版四二七—四二八頁。
(3) Werke I, S. 391. 大月版四二七頁。

八

「ヘーゲル法哲学批判序説」の後を承けて、そのプロレタリヤ観念を更に拡充させたのは一八四五年のエンゲルスとの共著「聖家族」(die Heilige Familie) である。「序説」のマルクスは、すでに社会主義者として、社会革命を遂行すべき現実的な担い手としてのプロレタリヤを発見し、これと「哲学」を結びつけなければならないということを強調した。この考え方は、この「聖家族」では一段と明確な形をとり、プロレタリヤの窮乏の中に社会革命の現実的な動因を見出すことができた。そして、この「窮乏」が階級闘争を激化させ、その極限において、社会主義的変革が必然的に起るものであると考えるに至った。無論「聖家族」は「序説」にくらべればその分析ははるかに現実的となってはいるが、なお、たとえば、対立物、止揚、人間的自己疎外、矛盾、非人間化、人間的本性などの言葉が頻繁に使われていることでもわかるように、ヘーゲルやフォイエルバッハの哲学的な用語と思考法がすこぶる目立っていて、経済学に甚だ不足している。「経済学・哲学手稿」(一八四四年) の後をうけた作品として、いささか奇異の感にたえない。

「聖家族」第四章の四、「プルードン」は全巻中最も異彩に富んだ部分であるが、ここでマルクスは、これまでの経済学が概ね「私有財産の諸関係を人間的、合理的な関係としてうけいれ、その基本前提たる私有財産に対して」何らの検討を加えることがなかったのに対して、「プルードンは経済学の基礎たる私有財産に批判的検討を、しかも最初の最も徹底的な、忌憚なき、同時に科学的検討を加えた。これはまことに彼がなしとげた一大科学的進歩であって、この進歩は経済学に革命を起し、真の経済科学 (eine wirkliche Wissenschaft der Nationalökonomie) を初めて可能ならしめるものである。プルードンの著作「財産とは何ぞや」は近世の経済学に対して、シェーエスの著作「第三身分とは何ぞや」が近世政治学に対して有すると同様の意義をもつものである」[1]といって、プルードンの著作「財産とは何ぞや」を絶讃すると共にこれを批判しながら、私有財産と貧困とプロレタリヤとの内的な関連を鋭く指摘するのである。

マルクスはまず資本制社会のよって立つ礎石である私有財産がプロレタリヤという対立物を生むことによって、却って自己の墓穴を掘らざるをえないという矛盾に陥ることを指摘して、

「プロレタリヤと富は対立物である。これらのものは、このようなものとして一つの全体をなしている。これは私有財産の世界の二つの姿態である。この二つのものが対立のうちで占める一定の地位が問題である。これを全体の二つの側面として説明するだけでは足りない。

私有財産は、私有財産として、富として、自分自身を、そして、それとともに、その対立物たるプロレタリヤを存在させておくことを余儀なくされている。それは対立の肯定的な側面であり、自分自身に満足した私有財産である。

プロレタリヤは逆に、プロレタリヤとしては、自分自身を、そしてそれとともに、彼をプロレタリヤたらしめ、彼を制約する対立物を、すなわち、私有財産を止揚することを余儀なくされている。それは対立の否定的な側面であり、対立自身における不安であり、解消された、また解消されつつある私有財産である[2]」。

その表現はヘーゲルの弁証法を思わせるマルクスは、ここで私有財産制をその基盤として、プロレタリヤから生産手段を奪っている資本制社会の構造が互に敵対する二つの階級の対立として現われていること、階級と階級闘争の基盤が経済的なものであることを指摘している。

資本制社会においてプロレタリヤは非人間化を完成されている。資本主義の発展がこの非人間化を押し進めるものとすれば、プロレタリヤは、私有財産制にもとづくこの社会そのものに反逆せざるをえないようにしむけられているわけである。「だから対立の内部では、私有財産所有者は保守的な党派であり、プロレタリヤは破壊的な党派である。前者からは対立を維持する行動がおこり、後者からはこれを絶滅する行動がおこってくる[3]」が、この闘争はプロレタリヤの勝利をもって終るが、「プロレタリヤが勝利しても、それによって、決して社会の絶対的な側面になるのではない。なぜならプロレタリヤは、自分自身とその対立者とを止揚することによって、はじめて勝利するからである。この勝利とともに、プロレタリヤも、またこれを制約する対立物としての私有財産も消滅する[4]」と述べて、マルクスは共産社会の実現の必然性を確信していたもののようである。

しからばプロレタリヤを、自己の解放、すなわち社会主義革命に駆り立てるものは何であるかといえば、それは、私有財産のために自分が追いこまれた「もはやしりぞけようのない、もはや弁解しようのない、絶対に有無をいわせぬ窮乏」と非人間性である。無産者が有産者のために窮乏のどん底に追いこまれて、遂に耐えきれず、社会に向って死に物狂いの反逆に立ちあがるという思想は、すでにマルクス以前にも存在して、格別に目新しいものではないが、これを資本制社会の上に移して、プロレタリヤの社会主義革命への必然的決起をといたのは特にマルクスであり、以来この考え方は「共産党宣言」や「資本論」では一層まとまった形で強調されるに至った。

プルードンはマルクスがまだ経済学の知識にうとく、余剰価値説を全く知らなかった一八四〇年代の初め、すでに私有財産と貧窮との内的関連に着目して「資本の運動がいかに窮乏を生みだしているかを詳しく立証した」。マルクスは更に一歩を進めて、このプロレタリヤの窮乏の中に窮乏を見ることなく、社会変革の現実的契機を見出したのである。すなわち資本主義はただ大いに窮乏を生みだすだけではなく、プロレタリヤに、資本制社会を打倒し、共産社会を建設するという歴史的使命を遂行させる諸条件を与えることによって、窮乏を絶滅させるという学説を付加したのである。

注（1） Marx, Engels; Werke Bd. 33.
（2） Marx, Engels; Werke Bd. 2, S. 37. 大月版全集二、三二—三三頁。
（3） Marx, Engels; Werke Bd. 2, S. 37. 大月版全集二、三三頁。
（4） Werke, 2, S. 37-38. 大月版全集二、三三—三四頁。

九

マルクスがプロレタリヤの問題を全面的にかつ系統的に取り扱ったのは一八四八年のエンゲルスとの共著「共産党宣言」であろう。この時、マルクスの世界観は殆ど完成の域に達していた。共産党宣言はこの新しい世界観を一八四八年の革命に対して宣言したものといえよう。この宣言で、マルクスは唯物史観を明らかにし、社会発展の法則が資本制社会の中で、い

かに運動し、資本主義はいかにして、その運動法則の必然的帰結として社会主義に移行するか、ブルジョワジーとプロレタリヤの興亡隆替とプロレタリヤの歴史的使命を述べるのである。「共産党宣言」は本来、「ブルジョワジーを打倒し、プロレタリヤの支配を樹立し、階級対立にもとづく古いブルジョワ社会を廃止し、階級もなく私有財産もない新しい社会を建設すること」を目的とした「共産主義者同盟」の「理論的かつ実践的な党綱領」として作成されたすぐれて政治的な文書であるから、その重点が特にプロレタリヤの政治的な側面におかれていることは当然といわなければならぬ。

「宣言」は四部から構成されている。

㈠　ブルジョワとプロレタリヤ

㈡　プロレタリヤと共産主義者

㈢　社会主義的および共産主義的文書

㈣　種々の反政府党に対する共産主義者の立場

ここで問題となるものは、右の中、㈠と㈡とであるが、特に㈡はプロレタリヤによる共産主義革命の戦術を論じたものとして注目すべきものである。

「これまでのすべての社会の歴史は階級闘争の歴史である」という名句に筆を起したマルクスは、叙述を原始共産社会には触れないで、古代奴隷社会からはじめているが、資本制社会以前の社会については、それがいずれも一様に階級社会であったこと、そしてそれぞれの社会に対立した基本的階級の名を列挙するだけにとどめて、直ちに資本制社会の階級構造とその社会の階級闘争との分析に注意を集中している。

しばらく、マルクスの言うところをパラフレーズしながら伝えよう。

近代ブルジョワ社会は封建社会の没落の中から生れてきたもので、階級社会であることは、それ以前の諸社会と何ら変るところがない。それはただ新しい階級、新しい抑圧の条件、新しい闘争の形態を古いものとおきかえただけである。現代もこのようなブルジョワ社会の継続発展したものであるが、その特徴は以前の複雑な階級対立を単純なものにしたというところにある。すなわち、全社会が相敵対する二大陣営に、その利害が直接に相対立する二大階級、ブルジョワジーとプロレタリヤに分裂しつつあるということである。

このブルジョワジーはどこから、いかにして生れてきたのであるか。彼らは、もとをただせば、封建社会の最下層に生きていた農奴であり、この農奴の中から初期の都市にでてきた城外市民[1]というのが、後のブルジョワジーのそもそもの原型であった。

しからばこのような城外市民はどうして近代ブルジョワジーとして資本制社会の支配階級の地位にのしあがったか。

マルクスは、「アメリカの発見、アフリカの回航が」、いかに「新興ブルジョワジーに新天地をひらき」、「商業に、航海に、工業に未曾有の飛躍を与え、それによって、崩壊しつつある封建社会の革命的要素を急速に発展させたか」、「マニュファクチュアに代って近代的大工業がおこり、工業的大富豪たる近代的ブルジョワが現われ」、その蓄積した巨大なる経済力をふまえて政治的舞台に進出して、近代的代議制国家において独占的な政治支配権を握るに至った[2]かを経済史的に、縷々として説いてゆく。

かくて「ブルジョワジーはわずか百年たらずの階級支配のあいだに、過去のすべての時代を合せたよりも一層大量的な、一層巨大な生産力をつくりだした[3]」。この巨大な生産力を「魔法で呼び出した近代ブルジョワ社会は、自分が呪文を唱えて呼びだした地下の魔物を自分の力ではもはや制御できなくなった魔法使に似ている。……その証拠として、周期的に襲来して回を重ねるごとにますます全ブルジョワ社会の存在をおびやかしている商業恐慌をあげれば十分である[4]。」ブルジョワ的生産関係にとってあまりに巨大に成長しすぎた生産力は、今や全ブルジョワ社会を混乱におとしいれ、その存在を危くさえし

ている。かつてブルジョワ的生産力はブルジョワジーが封建社会を打倒するのに役立った武器であったのであるが、いまやそれがブルジョワジー自身を滅す武器となってしまった。[5]

かつて封建社会の末期に、その社会の中から今日のブルジョワジーが生れ、それがブルジョワ社会を新しく建設したように、ブルジョワジーはブルジョワ社会の発展に伴って、その中から、ただに自分に死をもたらす武器を鍛えあげただけではなく、この武器を執る人間、つまりこの武器を使ってブルジョワ社会を打倒する人間をつくり出したのである。それがプロレタリヤである。[6]

ここでマルクスはまずプロレタリヤの意義を説明するが、彼の説明は「哲学の貧困」（一八四七年）と同様に経済学研究の進んだことを示していて、その表現もかつてのような哲学的のものではなくなっている。

「彼ら（プロレタリヤ）はただ仕事のあるあいだだけしか生活することができず、彼らの労働が資本を増殖するあいだだけしか仕事にありつくことができない。これらの労働者は、自分自身を切り売りしなければならないので、あらゆる他の売買される品物と同様に一つの商品である。したがって他の商品と同様に、あらゆる競争上の変化や市場の変動にさらされているものである。[7]」

近代的産業の発展に伴って、機械が普及し、分業が進むに従ってプロレタリヤの労働は、全く独立性を失い、全く魅力のないもの、単純なものとなり、プロレタリヤは単なる機械の付属物となってしまう。賃金は最低生計費に下落し、労働時間は延長されて、労働量は増大する。労働者の群は工場につめこまれて軍隊式に編成される。彼らは産業軍の兵士として士官、下士官からなる完全なる位階制の監視の下におかれて、ブルジョワ階級、ブルジョワ国家の奴隷となってしまう。かくて工業が発展すればするほど、毎日の労働はプロレタリヤにとって耐え難い重荷となってくるのである。

「かくて、プロレタリヤのブルジョワジーに対する闘争がはじまる。最初は個々の労働者が、次には一工場の労働者が、次には一地方の一労働部門の労働者が、彼らを直接に搾取する個々のブルジョワに対して闘う。……この段階ではプロレタリヤはまだ各地に散在し、競争によって分裂した群集である。……しかし工業が発展するにつれて、プロレタリヤは単にその数を増すばかりでなく、益々大きな集団に結集されて、その力は増大し、その力を自覚するようになる。機械が次第に労働の差違を消滅させ、賃金を殆どどこでも同一の低い水準に押しさげるために、プロレタリヤの内部における利害と生活状態は次第に平均してくる。ブルジョワ相互の競争の激化とそれから生じる商業恐慌とは賃金をますます動揺させる。ますます急速に発展してやまない機械の改良はプロレタリヤの全生活状態をいよいよ不安定にする。このため、はじめの中は単に個々の労働者と個々の資本家との衝突にすぎなかったものが、やがて本格的な階級間の衝突という性格を帯びるようになる。そこで、プロレタリヤはブルジョワに対抗する組合をつくりはじめる。賃金を維持するために団結する。彼らはこのような反抗のために永続的な組織さえもつくる。闘争は暴動となって爆発する」。このようにして、地方的闘争から、全国的闘争に、すなわち階級闘争に結集される。[8]

この階級闘争は必ず政治闘争として展開されなければならないとマルクスはいう。階級闘争の究極の目標は共産主義の実現である。従ってこの目的の達成には何よりもまず、政治闘争にまたなければならない。そこで、これよりマルクスはこの政治闘争に際して、プロレタリヤは何をなすべきか、その戦術を説くのである。

プロレタリヤは何よりもまず政治権力を掌握しなければならない。国民の指導的階級としての地位に登らねばならぬ、「労働者革命の第一歩は、プロレタリヤを支配階級の地位にのぼらせること、デモクラシーを戦いとることである」。この政治権力はいかなる方法によって獲得さるべきかと言えば「現社会の内部にひそんでいるところの内乱が公然たる革命となって爆発し、暴力によるブルジョワジーの転覆によって、プロレタリヤが支配権を樹立する……[9]」という章句に徴するとマルクスは暴力革命を肯定していたと考えていいだろう。

「プロレタリヤはこの政治権力を利用して、ブルジョワジーからすべての資本をつぎつぎに奪い取り、すべての生産要具を国家の手に、すなわち支配階級として組織されたプロレタリヤの手に集中し、生産力の総量をできるだけ急速に増大させる。……こうして発展の進むにつれて、階級の差別が消滅し、すべての生産が団結した人々の手に集中されたならば、公的権力は政治的性質を失う。もともと政治権力なるものは、一つの階級が他の階級を抑圧するための組織された暴力である。プロレタリヤはブルジョワジーとの闘争において、階級的に団結し、革命によって自ら支配階級となり、そして支配階級として強権的に旧来の生産関係を廃止するのであるが、今度はその生産関係の廃止とともに、階級対立の存在条件を廃止し、階級一般を廃止し、従ってまた自らの階級的支配権をも廃止するのである。

こうして階級と階級対立を伴う旧ブルジョワ社会に代って、各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件となるような一つの共同社会が生れるのである。」[10]

プロレタリヤの解放は一切の階級別、一切の階級対抗を廃止することによって始めて成就されるものであり、そしてこの階級別、階級対立を廃止するには、何よりもまずプロレタリヤがブルジョワジーの支配を転覆して、自分の手に国家権力を掌握しなければならないのであるが、この政権の移行は暴力によって行われる。かくてプロレタリヤは国家権力をにぎる。ブルジョワ国家に代ってプロレタリヤ国家が生れる。マルクスが「支配階級としてのプロレタリヤ」とか、「プロレタリヤは支配階級の地位に上る」とか、「プロレタリヤが支配権を樹立する」または「プロレタリヤの支配」とかという言葉で表現しているのはいずれもこのプロレタリヤ国家を指したものである。

プロレタリヤ国家は、「まずブルジョワの所有権と生産関係とに対する専制的な侵害」によって、「一切の資本と一切の生産要具をブルジョワジーから奪いとって」[11]これを「国家の手に集中し、生産力の総量をできるだけ急速に増大することによって、階級および階級対立の存立条件を廃止し、階級一般を廃止し、従って自分の階級支配権をも廃止する」[12]ことをその任務とするものである。この任務を遂行するために、プロレタリヤ国家の権力はいかなる方式で行使されるか、民主的か、独裁的かといえば、マルクスはあるときは「民主主義をたたかいとる」という言葉を使って、民主的方式の是なることを示唆し、またあるときは、「所有権およびブルジョワ的生産関係に対する専制的侵害を通じてのみ行われる」とか「旧生産関係を強権的に廃止する」とかと述べて独裁的方式の避け難いことを暗示しておって、彼の真意の那辺にあるのか十分明らかではない。[13]このプロレタリヤ国家という特殊の国家は、マルクスのいわゆるプロレタリヤ独裁を意味するものといわれているが、「共産党宣言」ではまだどこにも「プロレタリヤ独裁」という言葉は使われてはおらず、彼がはっきりとこの語を使ったのは、「宣言」から四年後の一八五二年、親友ワイデマイヤーに送った書簡[14]と一八七五年「ゴータ綱領批判」であることは広く知られているところである。

注（1）ヨーロッパの中世の都市は領主を中心に城壁あるいは境界標で囲まれた一定の地域がきめられていたのであるが、農村から出てきた農奴たちはその中に入ることが許されないで城壁の外（下）に住んでいた。しかし市民権だけは与えられていたので城外市民（城下民）と呼ばれた。

（2）マルクス―エンゲルス「共産党宣言」。角川版　三五―三六頁。

（3）前掲　四〇頁。

（4）前掲　四二頁。

（5）前掲　四三頁。

（6）前掲　四二頁。

（7）前掲　四二頁。

（8）前掲　四四―四五頁。

（9）前掲　四九頁。

（10）前掲　六一―六二頁。

（11）前掲　六一頁。

（12）　前掲　六二頁。

（13）　この点についてはレーニンの「国家と革命」（一九一七）の出版を契機として Kelsen, Mautner, Adler, Cunow, 福田、小泉等内外の学者間に激しい論争が戦わされた。

Kelsen; Staat und Sozialismus.

Mautner; Der Bolschewismus.

Adler; Die Staatsauffassung des Marxismus.

Cunow; Die Marxsche Geschichts „Gesellschafts“ und Staatstheorie.

福田徳三＝ボルシェヴィズム研究。

小泉信三＝社会問題研究。

（14）　一八五二年三月五日 Weydemeyer 宛の書信

……僕が新たにやったことは次の点を証明したことである。

一　階級の有無は生産の物質の歴史的発展段階に結ばれているにすぎないこと。

二　階級闘争は必然的にプロレタリヤ階級の独裁へ導くこと。

三　この独裁そのものは一切の階級の廃止と階級のない社会への過渡をなすにすぎないこと。

十

「共産党宣言」から「資本論」に移って意外に感ずることは、「資本論」にはプロレタリヤという語が余り使われておらず、これに代って Arbeiter, Lohnarbeiter, Fabrikarbeiter, arbeitende klasse, arbeitende Masse 等の語が使われていることである。第二巻、第三巻は専ら資本の流通行程を取扱っている関係上、プロレタリヤの語が見当らないのは一応うなずけるとしても、その使用が当然予想される第一巻にもただ僅かに数個所[1]にしか発見されないのは一体いかなる理由によるものであろうか。この事実をどう説明すべきであろうか。

この疑問を解く重要な手掛りとなるものはマルクスが資本論第一巻第二十三章で述べている左の一句である。

「資本の蓄積はプロレタリヤの増加である。プロレタリヤとは経済学的には、資本を生産し増殖しながら「資本氏」――ペクールの擬人法をかりれば――の価値増殖慾にとって過剰となれば街頭に放出される賃労働者のことに他ならない。[2]」

ここでマルクスが、プロレタリヤとは経済学的には賃労働者のことに他ならないといって、特に経済学的には と断っていることは別に意図あってのことであって軽く扱ってはならないと思う。マルクスの意図するところは、ややもすれば煽動者、宣伝者等を含む政治的意慾を暗示するプロレタリヤという社会学的概念と、賃労働者という純然たる経済学的概念とをはっきり区別するということである。つまり賃労働者という語は純然たる経済学的概念であるが、プロレタリヤという語は経済学的概念ではないということ、少しく補足していえば、経済学的概念プラス、アルファであるということである。マルクスはこのことを常に念頭に置いていたのであろう。資本論でプロレタリヤの語の使用を避けたのはこのような理由によるものであろう。そしてマルクスのこの態度は初期の作品以来、大体において貫かれているように思われる。

注（1）　マルクス＝資本論　第一巻　六七九、六八九、七一〇、七五九、七六〇、七六四、七七三、七八〇、七八二、七八五頁。

（2）　マルクス＝資本論　第一巻　六四五頁。河出版　四八五頁。

十一

以上述べたような哲学的、政治的、経済学的要素の外にマルクスのプロレタリヤ概念には更に強い宗教的要素が伏在するという事実を見逃してはなるまい。この宗教的要素とはプロレタリヤ・メシヤ主義の観念である。すなわち、プロレタリヤはブルジョワジーとの闘争を戦いぬいて、共産主義社会を実現し、人類を解放して、これに力と幸福とを与えるという世界史的な使命を負わされているという思想である。「階級の存在やその階級間の闘争を発見し」「この階級闘争の歴史的発展を記

述し、階級の経済的分析をして[1]」、唯物史観に近似する思想を表明した人々は、すでにマルクス以前にも少くないことは、彼自ら言明する通りであって、この点でマルクスの功績を余り高く評価することはできまい。しかし、プロレタリヤがメシヤ（救世主）となり、プロレタリヤの解放者、全人類の救済者となるべき必然の歴史的使命を負わされているという観念は、ひとりマルクスの創見であることは疑いえない。

旧約聖書にいう古代イスラエル民族は自らヤーウェ神の選民であり、その胎から、民を神の国に導くところの救済者メシヤが現われることを確信していた。

マルクスはイスラエルの子であった。そして彼の潜在意識には、すべての優れたイスラエル人に見られるように、このメシヤ的観念がひそんでいた。彼はその民族の宗教的根帯からはなれ、ヤーウェ神に対する信仰をうしない、唯物論者となった。しかし祖先の宗教から離れた孤独感がかえって彼の心に預言者的熱情を強く喚びさました。人間の精神的器質は決して新しく獲得した知的な学説によって消失するものではない。マルクスはその本質の深みにおいて依然としてイスラエル人であった。彼は神なくして実現される地上の「神の国」の到来を信じている。彼はキリストを否認し、その出現を待望し、地上に正義と幸福の王国を実現すべきメシヤをキリストのうちに認めない。彼は世俗化された形、すなわち、宗教的根帯から離された形において古代イスラエルの千年王国（ヒリヤズム）説を告白している。

しかしながら、マルクスにとって、ヤーウェ神の選民はもはやイスラエル民ではなくてプロレタリヤである。古メシヤはイスラエル民にすてられ、十字架にかけられて、奴隷のように死んでいる。彼は遂に真理、正義、力、幸福を地上に実現することなくして終った。彼の国はこの世の国ではなかった。

新しいメシヤは力と栄光とをもって現われるであろう。彼はあらゆるメシヤ的希望を実現するであろう。彼の王国はこの世の王国であろう。このメシヤはプロレタリヤの姿でマルクスに現われたのである。このプロレタリヤは正に人類の選民を形成し、マルクスは彼らに古代イスラエル民のそれよりも更に大なる徳性を賦与した。このプロレタリヤは他のすべての階級がすでに搾取の原罪にけがれているのにかかわらず、これから自由であり、純潔であり、未来の人類の最も道徳的な人間型を代表する、プロレタリヤのうちにこそ人間と労働との真正なる性格が表明されている。唯物史観、階級闘争論、余剰価値論、そして全人類の解放という固有の召命がプロレタリヤには啓示されている。プロレタリヤは、階級に分裂している古い人類の幻想を暴露し、階級闘争をやめ、階級そのものの存在を廃止し、人類を結合して、調和に導く。プロレタリヤの世界革命の勝利によって、人類はこれまで生きてきた必然の王国から共産主義によって出現する自由の王国へ飛躍することができる。真の歴史はプロレタリヤの勝利をもってはじまる。自覚せるプロレタリアは独一にして真正な人類である。[2]

ヘブライ人のメシヤ的史観に含まれる三つの根本的契機、すなわちヤーウェ神の選民イスラエル人と異邦人との対立、異邦人に対する神の厳しい審判、イスラエル人がメシヤの王国において復権するということ――これら三つの契機は、いずれもみなイスラエルの子であるマルクスの革命的信念においてそれぞれその対応的契機を見いだしている。選民イスラエル――旧約聖書の心の貧しき者――に対応するものはプロレタリヤであり、異邦人に対応するものはブルジョワジーであり、神の審判に対応するものは社会革命であり、そして選民がメシヤ王国で復権するという信仰は、マルクスでは、プロレタリヤが共産主義社会で解放されるという命題の形態をとっている。マルクスの社会革命の教義はいわば社会的黙示録ともいうべきものであるといったドーソンの評語[3]は軽妙である。

注（1）Marx の Weydemeyer 宛の書簡（一八五二年三月五日）。
（2）Berdiaeff; Le marxisme et la religion. 宮崎信彦訳　四六―四九頁。
（3）Dawson; Religion and the modern State. 深瀬訳。